

充たされざる者

The Unconsoled

Kazuo Ishiguro



カズオ・イングロ

古賀林幸=訳



充たされざる者

The Unconsoled

Kazuo Ishiguro



カズオ・イシグロ

古賀林幸=訳

THE UNCONSOLED by Kazuo Ishiguro
Copyright © 1995 by Kazuo Ishiguro
Japanese translation rights arranged with Rogers, Coleridge and White Ltd.
through The English Agency (Japan) Ltd.
Japanese edition © 1997 by Chuokoron-Sha, Inc.

み もの
充たされざる者 下

1997年 6月30日 初版印刷

1997年 7月10日 初版発行

著 者 カズオ・イシグロ

訳 者 こ が ば や し さ ち
古賀林 幸

発行者 笠 松 巖

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7

電話 販売部 03-3563-1431

編集部 03-3563-3666

振替 00120-4-34

本文印刷 三晃印刷

カバー・扉印刷 大熊整美堂

製本 小 泉 製 本

Printed in Japan ©1997 CHUOKORON-SHA, Inc.
ISBN4-12-002705-8 C0097

- ・定価はカバーに表示してあります。
- ・落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

充たされざる者 下

III

目が覚めると、明るい陽の光が縦型ブラインドの隙間から差しこんでいた。たいへんな朝寝坊をして時間を無駄にしてしまったかと、わたしはあわてふためきそうになった。しかしそのあと、きのうの夜、ミス・コリンズを訪ねようと決めていたことを思い出し、ずっと落ち着いた気持ちになつてベッドから出た。

今度の部屋は前よりも狭く、はるかに息苦しい気がして、わたしをここへ移らせたホフマンにまた腹が立つてきた。しかし部屋がどうこうという問題は、もはやきのうの朝ほど重要なことには思えず、顔を洗つて着替えをしながら、ミス・コリンズに会いに行くという大事な行動のほうにきつぱりと考えを向けることができた。いまやその訪問に大きな命運がかかっているのだ。部屋を出るころには、自分が寝坊したことも気にならなくなり——睡眠は、長い目で見ればとても貴重なものだとかつていた——うまい朝食を取るのが楽しみになつていた。そのあいだに、ミス・コリンズにどんな問題を相談すべきか、考えをまとめることができるだろう。

それから朝食を取ろうとカフェテリアへおりにいくと、驚いたことに、なかから掃除機をかける

音が聞こえてきた。ドアは閉まっていた、それを少し押し開けると、オーバーオール姿の女性二人が絨毯を掃除しているところが見えた。テーブルや椅子は壁ぎわに片づけてある。朝食抜きであの大事な相談に向かなければならないと思うと不愉快になり、わたしは少なからずむっとした気分でロビーに戻った。アメリカ人観光客の団のそばを通って、フロントデスクに歩み寄ると、フロントマンは雑誌を読みながら椅子に座っていたが、わたしの姿を認めるや立ち上がった。

「おはようございます、ライダーさま」

「おはよう。朝食が取れないようなので、少々がっかりしているんだ」

フロントマンは一瞬げんな顔をしてから、こう答えた。「いつもでしたら、この時間になりましても朝食をお出ししているのですが、何しろきょうがきょうなものですから、もちろん当ホテルの従業員も、おおぜいがコンサートホールへ出向いて、準備のお手伝いをしているのです。ホフマンも、朝早くからそちらへまいっております。そんなわけで、ただいまは半分ほどの人数で切り盛りしているしだい。あいにくとアトリウムの中も、昼食の時間まで閉めておかねばなりません。もちろん、コーヒーとロールパン程度でよろしければ……」

「いや、それなら結構」と、わたしは冷やかに答えた。「準備ができるまで、ここでぼうっと待っているような暇はないんだ。けさは朝食抜きですませるしかないだろう」

フロントマンはまた詫びを言いはじめたが、わたしは手を振ってそれをとどめ、歩き去った。

わたしはホテルの外の、太陽のもとに出た。そして渋滞した道路に沿ってしばらく歩いたとき、ようやく、自分がミス・コリンズのアパートへの道筋をよく知らないことに気がついた。シュテフ

アンの車であるアパートへ行つた夜は十分に注意を払つていなかったし、おまけに歩道も車道もこんなに混雑しているいまの時間帯では、何も見覚えのあるものがない。わたしはしばらく歩道に立ちどまって、通りがかりの人に道を尋ねてみようかと考えた。ミス・コリンズはこの町でよく知られた人のようだから、誰に訊いても教えてくれそうだと思つたのだ。実際、わたしはもう少しで、こちらに向かつてくるビジネススーツの男性に道を尋ねようとしたのだが、ちょうどそのとき、背後から誰かが肩に手をかけた。

「おはようございます」

振り返ると、そこにグスタフが立つていた。上半身がほとんど隠れるほど大きなダンボール箱を抱えている。荒い息をしていたが、それが重い荷物 of せいなのか、それともわたしを急いで追いかけてきたせいなのかは、定かではなかった。どちらにしても、彼に挨拶をしてどこへ行くのかと尋ねたところ、答えはしばらく返つてこなかった。

「ああ、ちょうどこの箱をコンサートホールまで持つていくところだったのです」と、ようやく彼が答えた。「大きな荷物はきのうの夜、すべてバンで運んだのですが、まだまだ必要なものがありましてね。けさ早くから、ホテルとコンサートホールを行ったり来たりでございますよ。あちらでは、みなさんもうすっかり興奮しておりまして。ええ、さようです。もう、その雰囲気になっております」

「それはよかった」と、わたしは言つた。「わたしもきょうの催しが待ちどおしいよ。ところで、ちよつと助けてもらいたいことがあるんだ。そのう、けさミス・コリンズのアパートを訪ねる約束をしたんだが、道がよく分からなくなつてしまつてね」

「ミス・コリンズですか？ それなら、ここからそう遠くはございません。こちらです。よろしければ、わたくしが一緒しましょう。いえいえ、どうぞご心配なさらないでください。たまた同じ方向ですから」

彼の持っている箱は、たぶん見かけほど重くはなかったのだろう。というのも、わたしたちが歩きたすと、グスタフは隣でしっかりと歩調を合わせてついできたのだ。

「こんなふうに偶然お会いできて、うれしゅうございます」と、彼は続けた。「率直に申しますと、お頼みしたかったことがあるのです。実は最初にお目にかかったときから、ずっとそう思っていたのですが、あれやこれやでなぜか機会を逃してしまつたものですから。そしてもう今夜が目前に迫ってきたというのに、まだあなたにそのお願いをしておりません。ほかでもない、つい数週間前、ハンガリアン・カフェで持ち上がったことなのです。わたくしどもの例の日曜の会合で。あなたがこの町におみえになると聞いたすぐあとのこととて、もちろんほかのみなさんと同じように、わたくしどももそのことを話しておりました。そのとき誰かが——あれはたしかジャンニだつたと思いますが——その彼が、どこかで読んだところによると、あなたがプリマドンナのようなタイプとは大違いの、立派なお方だとかごく普通の市民のことをとても気にかけてくださるともつぱらの評判だとか、そんなことをあれこれ話しておりましたのです。そしてわたくしどもが、あの夜ヨセフはいませんでしたから、たしか八、九人でテーブルを囲んで、広場の向こうに太陽が沈んでいくのを眺めておりましたとき、全員がたぶん同じことを考えていたと思います。最初は、みんなただ黙って座っていて、誰もあえてそれを口にする者はおりませんでした。そこでとうとうカールが、あれはまさしく彼らしいのですが、カールが全員の考えていたことを口にしたのです。『あの方にお願

いしてみたらどうだろう?』と。

『だめでもともとだ。お願いするくらい、いいじゃないか。どうやら、あのもう一人とは大違いの方のようなから、もしかしたら引き受けてくださるかもしれない。あの方をお願いしてみたらどうだろう、これが最後のチャンスかもしれないぞ』と。それで急に誰もかれもがそのことを話しだし、それからというものの、実を申しますと、顔を合わせれば必ずその話題が出ずにはすまなくなったのでございます。もちろん、ほかのことも話しましたし、みんななごやかに笑ってはおりましたが、そのうちふと会話がとぎれると、みんなまたそのことを考えていたのです。だからなのでございまずよ、自分でなさけない気がしてきましたのは。何しろわたくしは何度もあなたにお目にかかつて、ありがたいことにお話もしましたのに、一度もお願いする勇氣がなかったわけですから。そしていまや、この一大行事が数時間後に迫っているというのに、わたくしはまだお願いをしております。それを日曜日に、あの仲間たちにどう言いわけできましようか? 実際、けき起きたとき、わたくしは、どうしてもあなたを見つけないければ、ライダーさまにせめてお願いするだけでもしてみなければ、仲間たちはそれを頼りにしているのだと、自分に言い聞かせたのです。しかしそれから何やらかやらでとても忙しくなってしまう、あなたのほうもたくさんご予約がおりでしょうから、さよう、わたくしにはその機会がないかもしれないとがっかりしております。ですからこんなふうにお会いできて、ほんとうにうれしうございます。わたくしの口からお願ひしてもよろしいでしょうか。いえ、もちろん、とうていご無理だとお考えでしたら、それで結構でございます。仲間たちも納得しますでしょう。ええ、さようですとも」

わたしたちは角を曲がって、混雑した大通りへ入った。信号のある交差点を渡りはじめるとグス

タフは急に口をつぐみ、道路を横断してイタリアン・カフェの続く通りを歩きだしたときになって、ようやくまた口を開いた。

「何をお願いするつもりなのか、もうお察しのことと思いますが、ただほんの少し言及してはいただけではないでしょうか。それだけでございます」

「ほんの少し言及するとは？」

「ほんの少し言及していただくだけです。つまりご存じのように、わたくしどもの多くは、長年、自分たちの職業にたいするこの町の姿勢を変えようと努力してまいりました。少しは成果があったかもしれませんが、全面的に状況を変えるまでには、とても至っておりません。それでそのう、当然のことながら、あせりが生じてまいりましたね。仲間の誰一人として若返ることはございませんし、このままでは事態は決して変わらないのではないかと案じているのです。ですが今夜、ひとことなりともあなたに何か言及していただければ、未来がすっかり変わるかもしれません。この職業に就いている者にとって、それが歴史的な転機になるやもしれません。そのように仲間たちは見ているのです。実際、なかにはこれが最後のチャンスかもしれないと考える者もおります。少なくとも、わたくしの世代にとりましては。これほどのチャンスに、またいつめぐり合えますでしょうか？ みんなそう問いつづけてきたのです。それでいまここで、わたくしがお願ひしたというわけなのです。もちろん、そんなことは場違いだと思ひになるのです。わたくしのほうもそのように納得いたします。何と申しまして、あなたはとても重要な問題について講演なさるために、この町におみえになったのですから、それとくらべれば、わたくしがいまお話ししていることなどささいな問題です。わたくしどもにとっては重大事ですが、全体として見れば、分かっております

とも、ささいな問題でございますよ。ですからご無理だと思ひなら、どうかそうおっしゃってください。そうすれば二度と口にはいたしません」

わたしは彼が箱の後ろから食い入るように見つめているのを意識しながら、しばらく考えた。

「きみが提案しているのは」と、わたしはややあつて答えた。「わたしがほんの少しきみたちに言及することなんだね……そのう、わたしがこの町の市民の前でスピーチをするときに？」

「ほんのふたことみことで結構でございます」

この老ポーターと仲間をそのようなたちで助けるという考えには、たしかに心に訴えてくるものがあつた。わたしはしばらく考えてから答えた。「分かつた。喜んで、あなた方のことに言及しましょう」

グスタフが、この返事の衝撃をかみしめながら大きく息を吸いこむのが聞こえた。それから、彼はきわめて冷静に告げた。

「このご恩は一生忘れません」

彼はさらに何か言おうとしたが、なぜかわたしは、礼を述べようとする彼をじらしてやりたい氣になつた。

「ああ、少し考えてみよう。どうすればいいだろうか？」と、わたしはとつさに考えこむような振りをして言つた。「そう、演壇に近づいて、こう言うのはどうかな。『スピーチを始める前に、もう少し小さいながら重要な問題を一つお話ししておきたいのです』そんなふうに切りだしてみる。そうだ、それならまあ簡単じゃないか」

そのとき、急にわたしの脳裏に、屈強な老人たちがカフェのテーブルを囲んでいるところで、グ

スタッフがこのニュースを発表したときの彼らの表情——信じられないという思いと、はかり知れない喜びに満ちたその顔——が浮かんた。そしてわたしが彼らの真ん中へ黙って慎ましく入っていくと、彼らがわたしを振り向く場面を想像した。そのあいだもずっと、グスタッフがわたしと肩を並べて歩きながら、一刻も早く礼を言い終えたくてうずうずしているのが分かっていたが、わたしはなおも話を続けた。

「そう、そう。『小さいながら重要なことがある』と切りだすといい。『わたしはこれまで世界中の数々の都市を訪れてきましたが、この町に来て少し異様に感じたことがあるのです……』いや『異様』という言葉では、少し強すぎるかもしれない。『奇妙に』のほうがいいだろう」

「ええ、さようですね」と、グスタッフが口をはさんだ。『奇妙に』は、すばらしい表現でございませう。仲間の誰も、反感を買いたいとは思っておりませんから。しかしそれこそ、あなたがわたくしどもにとってめったにない機会を提供してくださる所以なのです。と申しますのも、あと何年かのあいだに、どなたか別の著名な方がこの町へのご訪問を承諾されて、わたくしどものために何かお話しくださるようお願いできたとしても、あなたほどの機転をお持ちになっている可能性がどれほどございましょうか？ 『奇妙に』は、まさに当を得た言葉でございませう」

「そう、そう」と、わたしは続けた。「それからたぶん一呼吸置いて、ややとがめるような目つきで会場を見回す。そうすれば誰もが、つまり会場中の全員が静まり返って、次の言葉を待つでしょう。そこでようやく、わたしが何かを言う。ああ、たとえば、そうだな。こんなふうに。『ここにお集まりの紳士淑女のみなさん、この町に長年住んでこられたあなた方にとってはごく普通のことと思われる、外から訪れた者にはたちまち目につく、ことがあります』……」

そのときグスタフが急に立ちどまった。わたしは最初、彼が謝意を表したい気持ちに圧倒されたのかと思った。しかし彼の様子を見ると、そうではないようだった。彼は舗道で身動きできなくなり、必死で箱を支えようと、その片側にほおを押しつけていた。目をかたく閉じ、これから頭のかなかでむずかしい計算でも始めようとするかのように、かすかに顔をしかめている。それからわたしがじっと見つめていると、彼ののどぼとけがゆっくりと上下した——一度、二度、三度と。

「大丈夫かい？」と、わたしは一方の腕で彼の背中を支えながら尋ねた。「何てことだ。どこかに腰をおろしたほうがいいんじゃないか」

わたしは箱を受け取ろうとしたが、グスタフはかたくなに手を箱から離そうとしなかった。

「いえ、いえ、とんでもない」と、彼はまだ目を閉じたまま答えた。「わたくしなら、まったく大丈夫でございます」

「ほんとうに？」

「ええ、ええ。わたくしなら、まったく大丈夫でございます」

彼はまだしばらく黙ってそこに突っ立っていたが、やがて目を開いてあたりを見回すと、かすかな笑い声を上げて再び歩きだした。

「わたくしどもにとってこれがどれほど大きな意味を持つか、あなたにはご想像もつきませんまい」と、グスタフは並んで何歩か歩いたあとと言った。「それもこれだけ長い年月のあとで」彼は笑顔で首を振った。「真つ先にこのニュースを仲間に伝えましょう。けさはたくさん仕事がございますが、ヨセフに電話をすれば、それですむことです。彼が残りの全員に知らせてくれましょう。これがどれだけの意味を持つか、ご想像になれますか？ ああ、しかし、あなたはここでお曲がりになった

ほうがよろしいです。わたくしはまだ少し先まで行かなければなりません。いえ、ご心配には及びません。わたくしなら、まったく大丈夫ですから。ミス・コリンズのアパートは、ご存じのようにここを右手に入ってすぐのところにございます。ほんとうに、何とお礼を申しあげたらよいか。仲間たちも、今夜はこれまでの何にもまして待ち遠しいことでしょう。分かっております」

わたしは彼に別れの言葉を告げて、彼が教えてくれた角を曲がった。何歩か歩いて肩ごしに振り返ると、グスタフがまだその角に立って、大きな箱の端からわたしを見送っているのが見えた。わたくしが振り返ったのを認めると、彼は必死で首を振ってから——箱を抱えているので、手は振れなかった——コンサートホールへと歩きだした。

わたしが入った通りは、いわゆる住宅街だった。数ブロック行くとあたりはますます静かになり、シュテファン車で来た夜に見たスペイン風のバルコニーのあるアパートが見えてきた。そんな建物が何ブロックも続いているので、わたしは歩きながら、ボリスと二人であの夜、外で待っていたアパートが分からないのではないかと、不安になりはじめた。しかしそれからふと気づくと、はっきりと見覚えのある玄関の前に来ていた。わたしはしばらく立ちどまってから玄関への階段を上がり、ドアの両側にあるガラスのパネルから、なかをのぞいてみた。

玄関ホールには整然とごく月並みな家具が置いてあるだけで、ここがあのアパートだという確証はほとんど得られなかった。それからあの夜、シュテファンとミス・コリンズが奥の部屋に入っていく前に、表に面した応接間でしばらく話をしているのを眺めていたことを思い出した。わたしは泥棒に間違えられるのを覚悟で低い壁に片足をかけ、身を乗りだして、いちばん近い窓からなかを